
猫の置物

二天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の置物

【Nコード】

N3927J

【作者名】

二天

【あらすじ】

生きることなんて何でもない。

そんな考えをしていた主人公「僕」に、ある出来事が起きる。

その出来事は何でもない出来事かもしれない。

しかし「僕」には大きな体験で、決して何でもないだなんて言えない。

なんでもない事の中にある大きなもの。

そんな事を書いた物語です。

今、僕はどこにいるのか全くわからない。

ただわかるのは、周りは墨で染められたみたいに真っ暗で、その中に僕と、なぜか見えている猫の置物が僕の正面に座っているだけ……猫の置物には驚いた。まるで本物の猫と変わりがない。目も生き生きとパツチリ開いていて、鼻もぴくぴくと動かしながら空気を吸い吐きしそつである。しかし本物の猫とは言えない。大きさがおかしいのである。座っている姿の猫の置物は170cmある僕の身長と高さが同じなのだ。

・・・置物はどうでもいい。そんなことよりなぜ僕はこんなところにいるのか？

「死んだか？じゃあここは天国か地獄だな」

死んだ。僕は何も考えずに真っ先にそう思った。

まるで感情のない機械のようだ。僕は軽い気持ちで死んだと仮定をした。

別に死んだと仮定した時点で何も起らない。周りは真っ暗で、僕と置物しかないのだから……

僕はそのままあぐらをかき、退屈そうに猫の置物を見た。

「どうしてあるんだ……」

何気なく猫に聞いた。当然だが、返事はない。猫は所詮置物なのである。返事などするわけが無い。僕はどうしても置物に話しかけたのか自分自身不思議に思った。それから猫の置物も僕も動くことなく、ただ見つめ合っただけで氷のような沈黙が続いた。

どうしてだろう・・・
なぜか猫の置物はどこか生き生きとしている。
それに比べ僕は・・・

いつからか僕はそんなことを思うようになり、どこかに孤独を感じるようになっていた。

生き物ってなんだろう・・・
置物は生き物じゃないのか？
僕は今まで生きていたんだろうか・・・

幼稚園児みたいなこと、今まで考えたことすらないのに、なぜかこの時僕は思った。
そしてそんな考えは次第に大きくなっていき、もはや抑えきれない感情をも生んでいく。

「家に帰りたい・・・もつといろんなことがしたい・・・もつと沢山話がしたい・・・」

今までにないくらいの鼓動が、心臓から聞こえる。
僕は猫の置物を見つめながら、必死で猫の置物に気持ちを伝えよう

とするが、当然猫はそれに答えるはずがない。
いつしか僕はあぐらではなく、正座をしていた。

「まだ死にたくない！まだやりたいこと何も出来ていないじゃないか！冗談じゃない」

怒り、恐怖、悲しみ、全ての感情が直接猫の置物にぶつかっているはずである。

しかし、それでも猫の置物はなんでもないかのように同情するでもなし、やめてくれとも言わず、動きの1つすら見せることなくただ僕を無視し続ける。

「あの世なんて嫌だ！絶対嫌だ！ふざけんな」

こんなに感情がむき出たこと、こんなに叫んだこと、こんなに震えたことなんて今まで無かった。

僕はとにかく叫んだ。

涙だつて止まること、勢いの限度も知らずに流れている。

顔では涙がすごい勢いで流れ続け、心では感情がすごい勢いで流れ続けている。

このときの僕にはもう、無言でいられる力など無く、思ったことをそのまま口から出すしか出来なかった。

今までの僕と今の僕とでは全てが逆転している。

命の大切さ、そんなことは今までに何度人に聞かされてきたか。

それでも今までは「死んだらそれまで」

だけど今では「生きたい」

足掻いても足りず、叫んでも足りず、泣いても足りず……

とにかく「死にたくない」「どんなことをしてでも「生きたい」

このとき僕は初めて「生きること」の大切さを知ったのかもしれない。

気がつけば僕は慣れた臭いのする布団の中にいた。

僕はそうとう泣いていたらしく、布団はびしょ濡れ。かなり気持ち悪かった。

どうやら夢だったらしい。僕は濡れている顔を手で拭き、布団から出て窓の外を見た。

空は青く、そこを雲が自由に散歩し、その下では木々が世間話をしている。

「きもちいいな」

そういつて僕は頭を思いつきり搔いた。

《おわり》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3927j/>

猫の置物

2010年10月28日04時05分発行